T Sakai Keiko P Yagi Takuya

Vol.6

宮崎鍛冶屋 宮崎春生さん

Miyazaki Haruki

久しぶりとなる「気になるこの人。」の取材に向かったのは、五島の福江市。出発の2週間ほど前に、「20代の若い兄ちゃんが、ひとりで鍛冶屋ばしとるとげなよ。今どき珍しかたい。気にならんね」と知り合いから言われた。“若い兄ちゃん”という響きに、なんだか金髪のヒョロヒョロというイメージが浮かんだ。季節は夏。じゃぁ、どんなもんか、見てみるのもよかね〜と、観光気分でジェットフォイルに乗った。ビーチサンダルにサングラス。そんなものもバッグに入れて、カメラマンと長崎の港を後にした。

工場はもともと谷川鍛冶屋として使われていたものを約半年かけて整備した。

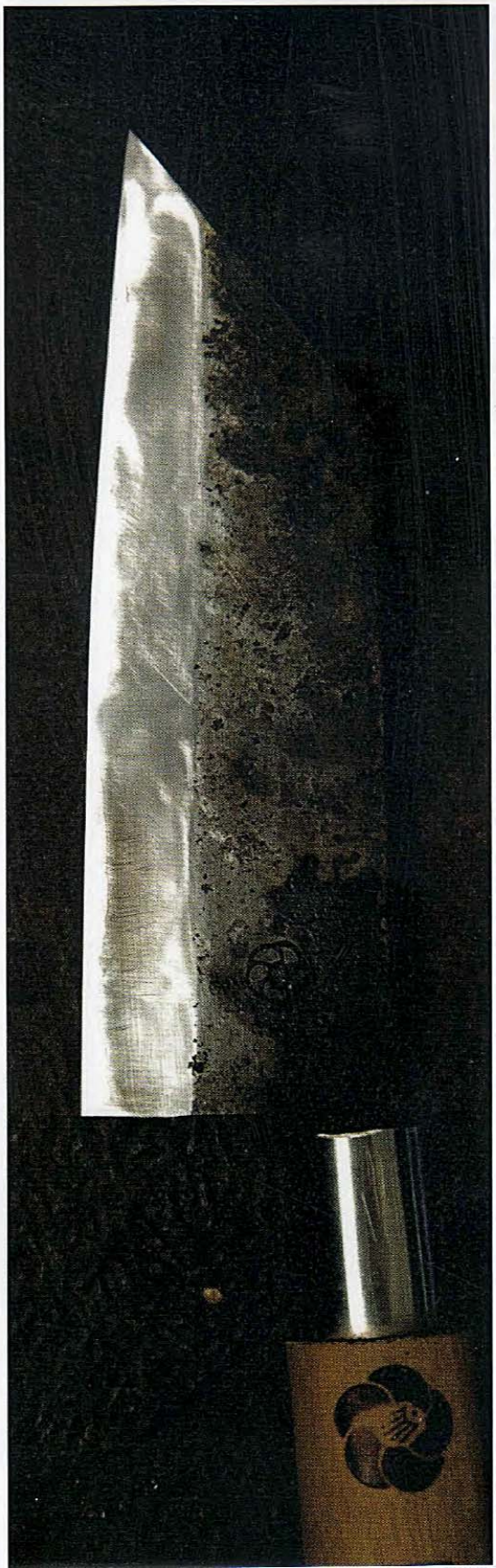
火花と青年

福江港から車で約15分。島の北に位置する岐宿町にその工場はあった。周囲は魚津ヶ崎（ぎょうがさき）の深い入り江と、のどかな田園風景。観光地にはまったくもって程遠い場所だった。

開けっぴろげの玄関から工場内をちょろっと覗いてみる。綿のジャンパーにチノパンを身に付けた若い兄ちゃんが鍛冶場でカンカンやっている。私たちと目が合うと、急いで作業を中断して笑顔で対応してくれた。腰が低くて人の良さそうな青年。それが最初の印象だった。

宮崎春生さん。27歳。ゴウゴウと炎を上げる焼き場で、吹き出る汗を拭うことなく、ただひたすらに鋼を焼き、打ち、裏を返し、また打つ。その度に火花が飛び、鋼は眩しいほど光り輝く。右手に持った大きな金槌が勢いよく打ちつけられると、鋼は少しずつその姿を変えていった。

作っているのは椿包丁。椿とは五島のシンボルであることから名前に使ったという。包丁は極軟鋼（ごくなんこう）という炭素含有量が少なくて柔らかい鋼に、島根県産の堅い鋼を溶かし込み、焼いては打ってを繰り返して完成する博多包丁に倣っている。聞けば、福岡でも有名な「大庭鍛冶工場」で5年間修業を積んだのだという。それも無給というカタチで。そのいきさつを説明しよう。



大庭鍛冶工場の3代目・大庭利夫さんと2ショットの写真が工場内に飾られている。

端正な顔つきの春生さん。遅い時は夜9時まで作業する頑張り屋。

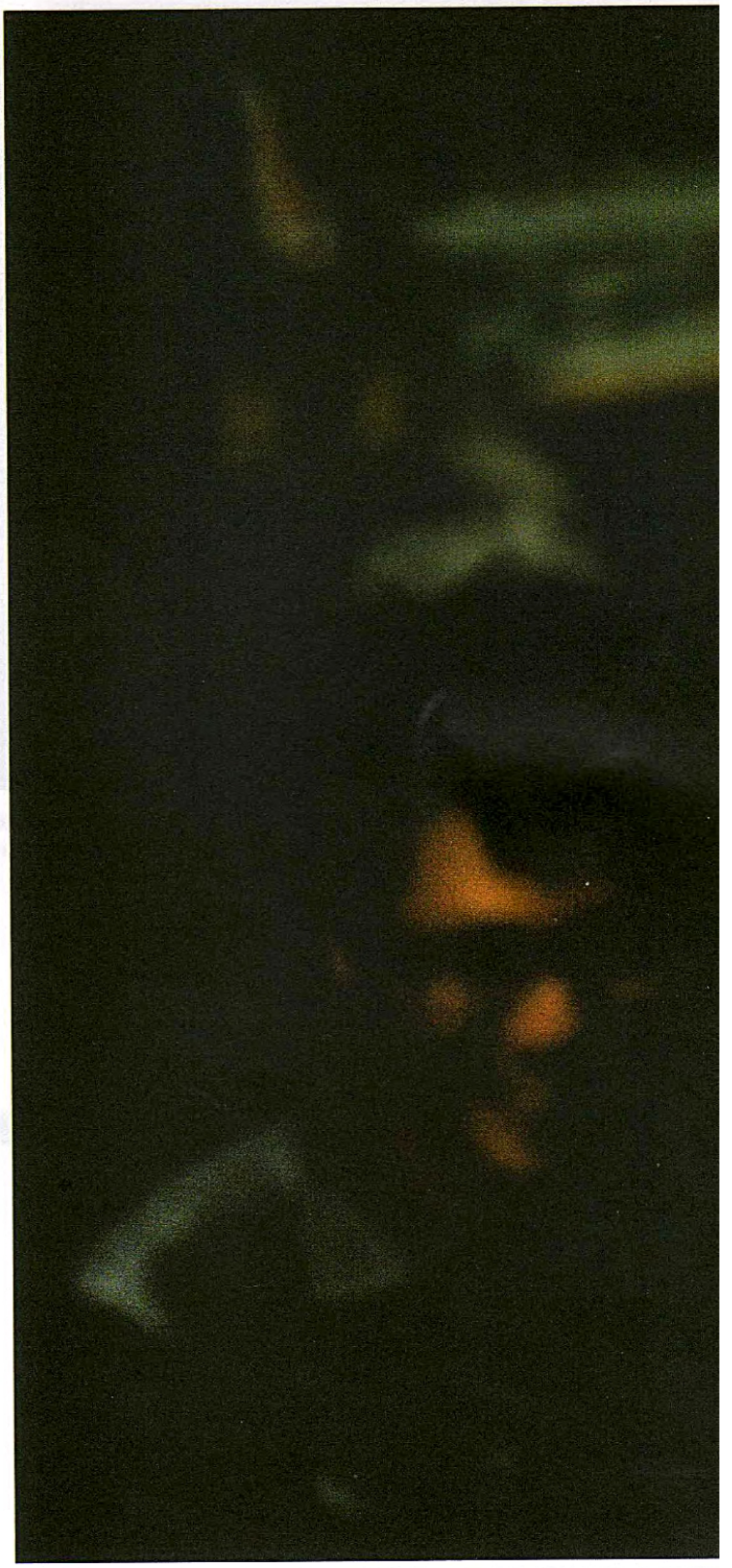
カトリック信者の春生さんの仕事場にはマリア様が飾られている。

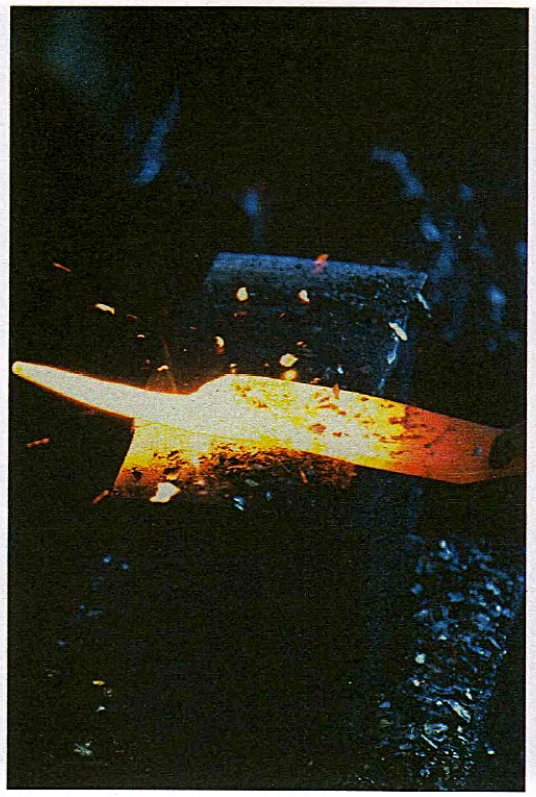
自分のためにもなり、人のためにもなる仕事

そもそも、鍛冶屋という職業に興味を持ったのは、高校2年生のとき。医師である父の考えに感化されたことも大きい。春生さんの父昭行（てるゆき）さんは、インドへ出向いた時、偶然にもマザーテレサに会うことができたという。そばにいた子どもたちは皆たいへんな生活をしているはずなのに、その目はキラキラと輝いている。それは心が満たされている証拠。その光景に感動した昭行さんは、帰国後カトリック信者へ改宗。さらに、自給自足に近い生活を目指すべく、家族全員で長崎市から自然豊かな五島市へ移住した。春生さんが9歳の時だった。

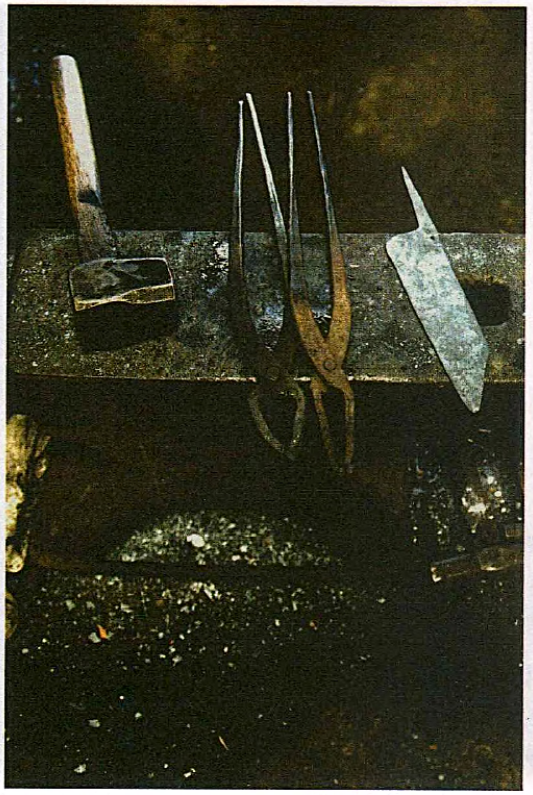
五島市で医師の仕事をしながら、米づくり、馬や豚の放牧、竹かご作りなど、出来ることは何でも挑戦してきた昭行さん。春生さんはその姿をずっと見てきた。「実が成るほど頭は下がる。素直な気持ちで謙虚に生きろ」それが父の口癖だ。将来、自分の手だけで生きていくためには、技術を身につけることが必要だ。そしてそれは自分のためにもなり、人のためにもなる仕事でありたい。春生さんは自分なりに考えた。そしてある日、作物を作るのには道具が必要不可欠であることが分かった。それも、頑丈で長く使える本物の道具……。これがヒントとなり、鍛冶屋という職業に興味を持つことになったのだ。

いくつか鍛冶屋を見学してまわり、一番心を動かされた博多の大庭鍛冶工場に足を運んだ。「弟子にして欲しい」。その言葉を何度も何度も伝えては門前払いをくらった。それでも諦め切れず、春生さんは勝手にアパートを借り、「もう五島へ帰ることはできないから」と、頼み込んだ。主の大庭利夫さんもきっと腹をくくったのだろう。「給料は払えないぞ」の一言で、やっとその門をくぐることが許された。「給料なんていただく気はありませんでした。教えてもらうのですから、逆に授業料を払う気持ちでしたが、それは断られました」。くったくのない笑顔で話す春生さんの目がキラキラと輝く。

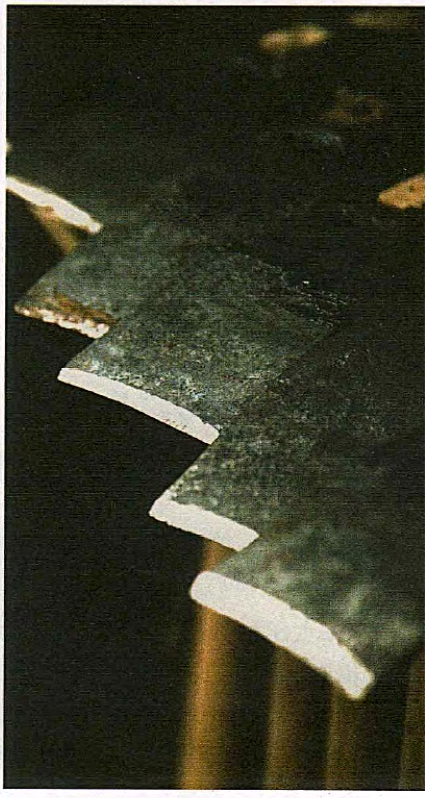




真っ赤になった鋼を熱いうちに金槌で打ちつける。その度に強烈な火花が飛ぶ。



春生さんが使う道具たち。使い古された金槌に掴みばさみ、そして完成途中の包丁。



鋭く尖った歯がギラリと輝く。店内には手作りの鍬やカマなどがズラリと並ぶ。

取材が終わって、私たちはその家族愛に圧倒されていた。それよりも何よりも、若い兄ちゃん=金髪のヒョロヒョロを訂正したい気持ちでいっぱいになった。あんなにしっかりした意見と「自分」を持っている青年に出会って、このまま海で…という気分に到底なれなかった。

そそくさと家に戻って、購入した椿包丁を使ってみた。ずっしりとした重み、ザクッとした切れ味。あまり力を入れずともスッと切れるバランスの良さ。そして、ギラリと光る刃先の鋭さには、まだ27歳という若い荒々しさがみなぎっているように見えた。

五島市にたった2軒しかない鍛冶屋。春生さんの活動そのものが、これからどのように周囲を変えていくのか……気になってしょうがない。

宮崎鍛冶屋

長崎県五島市岐宿町川原 3553-1
tel & fax 0959-82-1440
営 9 時～ 19 時　土、日曜休

オリジナルの椿の刻印を刃に
打ちつけ、椿包丁は完成する。

新しいものを追わず、古き良きものを大切に守る

春生さんが作る椿包丁は、黒々とした背に、まだら模様。先が尖り、刃の背が少し反り返っていることで切り方に勢いがつく。持てばずっしりと重く、葉物も肉も魚もサクッと切れる一本包丁だ。刃の先から先まで堅い鋼が入っているため、研ぎ磨くことで長く使える利点もある。包丁だけにとどまらず、カマや鍬の農具から漁具まで作る道具は幅広い。もちろん刃研ぎや修理も受けていて、時間があればお年寄りの家に出向いて修理する。「昔の人は、ものを大事に使っていました。今も、長年使いなれた鍬を大切にしている人が多いですね。この鍬は98歳のおばあちゃんのものですが、新しいものを追わず、古き良きものを大切にする心が伝わってきます」。春生さんもこの精神を守っていきたいのだという。錆つきにくく、軽いステンレスの包丁が登場して依頼、鋼の包丁は次第に姿を消していった。本当にいいものを、今どれだけの人が理解し、求めているのだろう。この鍬はそれを問いかけているかのようだった。

5年の修業を終え、平成21年7月に宮崎鍛冶屋の主となった春生さん。最初に完成した1本は、母に贈ったのだという。独り立ちしたその出来栄えを母はどう見つめたのだろうか。そして父には農耕具を。息子が作った道具で命を育て、それを料理する。その姿はまさに家族が目指す「自給自足」という営みそのものだった。